伊勢国府跡 18

2016年3月

鈴鹿市考古博物館

例言

1　本書は，国庫・県費補助事業として鈴鹿市が平成 27 年度に実施した市内遺跡発掘調査等事業のうち，伊勢国府跡（長者屋敷遺跡第 34 次）調査の概要をまとめたものである。

2　発掘調査は以下の体制で実施した。

調査主体　鈴鹿市　市長　末松則子

調査指導

伊藤久嗣（鈴鹿市文化財調査会委員）

川越俊一（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所名誉研究員）

金田章裕（京都大学名誉教授）

和田勝彦（財団法人文化財虫菌害研究所常務理事）

渡辺　寛（皇學館大学名誉教授）

文化庁文化財部記念物課　三重県教育委員会社会教育・文化財保護課　三重県埋蔵文化財センター

調査担当　鈴鹿市文化振興部考古博物館

鈴鹿市考古博物館長　澤井　環

副参事兼埋蔵文化財グループリーダー　川久保治彦

埋蔵文財グループ　主幹　藤原秀樹・西村　浩　主査　田部剛士・吉田隆史　事務員　木下之侑市

嘱託職員　小川陽子・太田有香

3　発掘調査を実施した場所及び面積・期間等は以下のとおりである。

（第 34 次）鈴鹿市広瀬町字南野 955 番 3〔6AGH-C 区〕　面積 132㎡

字荒子 985 番〔6AIF-E 区〕　面積 81㎡

調査期間　平成 28 年 2 月 1 日～平成 28 年 3 月 15 日

4　現地調査は藤原が担当し，太田が補助した。本書の執筆・編集は藤原が担当した。

5　調査参加者は以下のとおりである。

〔現地調査〕　澤井五十二・加藤　衛・坂　長年

〔屋内整理〕　永戸久美子・加藤利恵・前出みさ子

6　Fig.1 では国土地理院 20 万分の 1 地勢図「名古屋」の一部を，Fig.3 では国土地理院 2 万 5 千分の 1 地形図「鈴鹿」・「亀山」の一部を，Fig.9 では昭和 36 年撮影航空写真の一部を加工して使用した。

7　座標は過去の調査との整合性を保つため，日本測地系第Ⅵ系を用いている。なお，図中の方位は座標北を示す。

8　本調査に係る図面・写真は全て鈴鹿市考古博物館が保管している。

9　調査及び報告書刊行にあたっては上記指導委員の他に，地権者並びに地元各位をはじめ，下記の方々のお世話になりました。記して感謝申し上げます。（順不同・敬称略）

麻生　満・麻生忠博・麻生勝美・新名　強・川辺浩司・泉　雄二

三重県教育委員会社会教育・文化財保護課・三重県埋蔵文化財センター・斎宮歴史博物館・亀山市教育委員会

広瀬町自治会・広瀬町能褒野自治会・西冨田町自治会・中冨田町の山自治会・中冨田町の町自治会

本　文　目　次

Ⅰ　遺跡の位置とこれまでの調査成果　1
Ⅱ　調査に至る経緯と経過　4
Ⅲ　6AGH-C 区の調査　5
　1　基本層序　5
　2　調査の方法　6
　3　検出遺構　6
　4　出土遺物　7
　5　6AGH-C 区調査のまとめ　8
Ⅳ　6AIF-E 区の調査　8
　1　基本層序　8
　2　調査の方法　9
　3　検出遺構　9
　4　出土遺物　9
　5　6AIF-E 区調査のまとめ　11
Ⅴ　全体のまとめ　12
　参考文献　12

表　目　次

Tab.1　調査履歴　4
Tab.2　報告書抄録　16

図　版　目　次

Fig.1　伊勢国府周辺の主な寺院・官衙関連遺跡　1
Fig.2　調査区位置図　2
Fig.3　伊勢国府跡拡大方格地割案　3
Fig.4　遺跡の位置と周辺の遺跡　3
Fig.5　6AGH-C 区配置図　6
Fig.6　6AGH-C 区平面図①・溝土層断面図　7
Fig.7　6AGH-C 区平面図②　8
Fig.8　6AIF-E 区配置図　9
Fig.9　6AIF-E 区平面図・溝土層断面図　10
Fig.10　調査地周辺空中写真　11
Fig.11　出土遺物実測図　12

写　真　図　版　目　次

Plate1　13
　1　6AGH-C 区調査前風景
　2　6AGH-C 区南北トレンチ全景
　3　SD329・330
　4　SD329・330
　5　SD331
　6　6AGH-C 区東西トレンチ表土除去風景
　7　6AGH-C 区南北トレンチ全景
　8　6AGH-C 区東西トレンチ全景
　9　6AGH-C 区東西トレンチ全景
Plate2　14
　10　SD332
　11　SD333
　12　6AGH-C 区東西トレンチ東端サブトレンチ
　13　SD334 及び風倒木痕
　14　6AIF-E 区調査前風景
　15　6AIF-E 区東西トレンチ表土除去風景
　16　6AIF-E 区西トレンチ全景
　17　SD335
Plate3　15
　18　SD335 北サブトレンチ北面セクション
　19　SD335 北サブトレンチ丸瓦出土状況
　20　SD335 南サブトレンチ北面セクション
　21　SD335 南サブトレンチ南面セクション
　22　6AIF-E 区東トレンチ遺構検出作業風景
　23　6AIF-E 区東トレンチ全景
　24　SK336 及び風倒木痕
　25　SK336
　26　出土遺物

Ⅰ　遺跡の位置とこれまでの調査成果

国史跡伊勢国府跡（長者屋敷遺跡：以下，遺跡としては「長者屋敷遺跡」）は鈴鹿川の支流である安楽川の左岸に位置する。一帯は標高約 49m の台地上，水沢扇状地の中期面に相当し，台地南面に広がる谷底平野との比高差は約 20m である。

遺跡の北半は鈴鹿市広瀬町に，南半は西冨田町に属する。また，遺跡の西半は亀山市域に及んでいる。当遺跡一帯は鈴鹿市の農業振興地域であり，水田のほか茶・サツキ苗・芝などの商品価値の高い畑が広がり，処々に牛舎・豚舎および製茶施設が点在する。

瓦の出土や「長塚」「中土井」などの字名に残るように基壇や土塁状の高まりが各所にみられることから「矢卸長者」の伝説も伝えられ，古くより知られている。遺跡の範囲は南北約 1,300 m・東西約 700m と広いが，瓦など古代の遺物が散布する範囲は南北約 800m・東西 600m に限られる（村山 1992）。瓦散布範囲の南端中央で平成 5 年度に確認された国府政庁と政庁の北で発見された建物群を合わせた 73,940㎡が，平成 14 年 3 月 19 日に伊勢国府跡として国の史跡に指定されている。長者屋敷遺跡における国府関連の遺構・遺物の時期は 8 世紀中頃から 9 世紀初頭と狭い範囲に限られている。

鈴鹿川流域には古くから東西交通の要衝として多くの遺跡が残される。古代には畿内と東国を結ぶ東海道が通っていたと考えられる。延喜式に知られる伊勢国の鈴鹿・河曲・朝明・榎撫の各駅家を経由して尾張国に至る経路のうち，鈴鹿駅家は鈴鹿関付近に，河曲駅家は伊勢国分寺および隣接する河曲郡衙（狐塚遺跡）周辺に位置したことは疑いない。

古代官道の遺構としては，鈴鹿川右岸の平田遺跡で側溝芯々間が 9 mの道路痕跡が発見されている（林 2005）。この道路遺構は奈良時代後半のものと考えられる（田部 2016）。鈴鹿市国府町（以下「伊勢国府推定地」）と同国分町の伊勢国分寺を結ぶ線上に立地する。奈良時代の一時期には亀山市関町古厩（鈴鹿駅家推定地）と伊勢国府推定地を結んで鈴鹿川右岸を通る官道が存在したのであろう。奈良時代中期頃になると，鈴鹿関や広瀬町の伊勢国府が鈴鹿川の左岸に整備されるに伴い，官道も鈴鹿川左岸に付け替えられたと考えられるが，まだその実態は明らかになっていない。

長者屋敷遺跡で国府跡が確認されるまでは，鈴鹿市国府町が，国府という地名とともに，伊勢国総社と考えられる三宅神社や府南寺といった由緒ある社寺が残ることなどから，古くより伊勢国府の地と考えられてきた。

伊勢国府推定地一帯ではこれまで各所で緊急調査が行われている。三宅神社遺跡の第 1 次調査では奈良時代前期の大型方形井戸が検出された（新田 1997）。第 2 次調査では整然と配置された平安時代の掘立柱建物群が（藤原 1997），第 5 次調査では墨書土器や斎串などの祭祀具を伴った井戸や大型の掘立柱建物群などが確認

Fig.1　伊勢国府跡周辺の主な寺院・官衙関連遺跡　1/200,000

されている（林 2001）。また，天王山西遺跡では施釉陶器を多く伴った掘立柱建物群が検出されている（杉立 2001）。梅田遺跡では平安時代前期の集落と平安末期から鎌倉時代にかけての有力者の居宅が調査されている（石田 2001）。また，富士遺跡では鋳造遺構が検出され（田部 2007），黒色土器がまとまって出土している（吉田隆 2008）。このように，国府地区には奈良時代前期および奈良時代後期から平安時代にかけての遺構・遺物が濃密に分布する。初期および後期国府が所在した可能性が極めて高いと考えられているが，今のところ明確に官衙であることを決定付ける遺構は確認されていない。

長者屋敷遺跡において初めて調査が行われたのは昭和 32（1957）年である。歴史地理学的な国府研究の一環として鈴鹿市国府町で調査を行っていた京都大学の藤岡謙二郎らが鈴鹿川・安楽川を挟んだ対岸の長者屋敷遺跡の存在を知り調査を行った。当時，国府町に国府方八町域を想定していた藤岡は，長者屋敷遺跡が初期の国府である可能性を示唆しながらも，鈴鹿関との関連から軍団跡である可能性を強調した（藤岡ほか 1957）。

鈴鹿市では平成 4（1992）年度から長者屋敷遺跡の学術調査を開始し，平成 5 年度の「矢下」地区における国府政庁跡（以下「政庁」）の確認によって伊勢国府跡であるとの評価が定着した（藤原ほか 1995）。政庁の北方においては「南野南」「長塚南西」「中土井南」の各地区（地区の通称は Fig.2 参照）において礎石建ち瓦葺建物群（以下『北方官衙』）が発見された（新田 1997・1999 ほか）。

また，三重県埋蔵文化財センターによる緊急調査で北方官衙に伴う方格地割の存在が明らかとなった（宇河 1996）。調査を担当した宇河雅之は国府政庁域を含む南

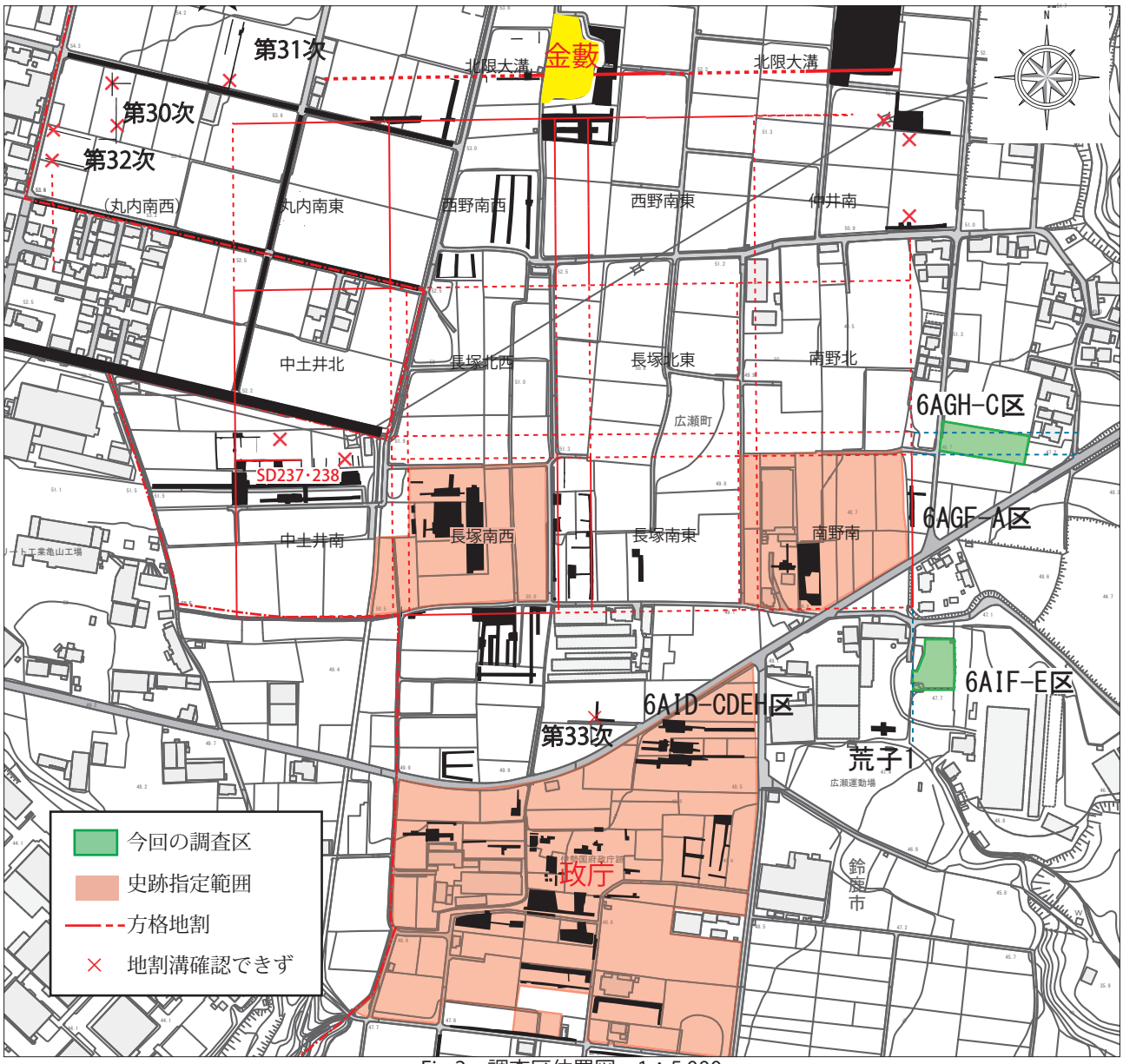


Fig.2　調査区位置図　1：5,000

北 6 区画・東西 5 区画の方格地割を想定し，北端に位置する金藪を平城宮における松林苑に相当すると考えた（以下仮に『拡大方格地割案』とする）（宇河 1997：Fig.3）。

方格地割についてはその後の調査で北方官衙域において南北 3 区画・東西 4 区画の区画施設が徐々におさえられる一方（吉田真 2005・小倉 2006・水橋 2005），政庁以南においては「朱雀路」のみならず地割や官衙らしき遺構は全くは確認されなかった（水橋 2005・吉田 2005）。さらに，政庁と北方官衙の方格地割の間には官衙的な遺構はほとんど無く，幅約 150 mの空白地帯となっていることから，政庁と北方官衙が一体のものであるかについては疑念もある（新田 2001・吉田真 2002）。しかし，方格地割の中軸線に相当する位置で発見された幅 24m の南北大路が金藪や政庁の中軸線と一致することが確認され，3 者の計画的な関連性は確実であろうとされている（田部 2010）。

方格地割の北の要となる金藪は，長者伝説の舞台として知られ『高津瀬村誌』には「金藪」の項に「古長者ノ亡ブルヤ金ヲ此ニ埋メ置キシ若シ廣瀬村ヒヘイニ陥ルノトキハ之ヲ堀レト」と記される（水野 1907）。こうした口伝の存在からか，金藪の発掘は古来忌避されており，昭和の初めに陸軍北伊勢飛行場が建設された際も金藪を避けて軍用地が定められた。

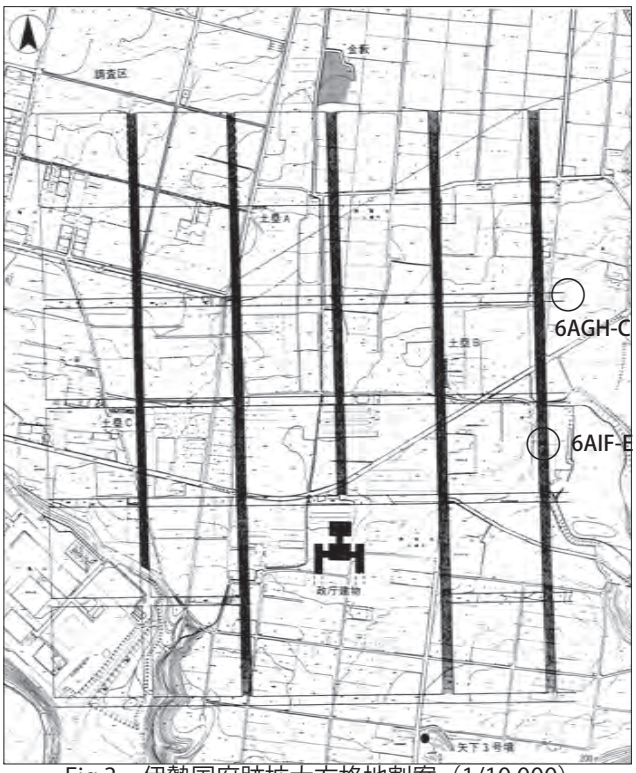


Fig.3　伊勢国府跡拡大方格地割案（1/10,000）
（宇河 1997 を加工）

現状は一見前方後円墳を思わせる高まりとなっている。地権者の意向で本体の発掘調査は行えず，測量調査を行ったのみである（田部 2008）。しかし，外周部の調査の結果（田部 2007・2009）何らかの基壇を有する建物が存在する可能性が高いと考えている。

Fig.4　遺跡の位置と周辺の遺跡　1/75,000

Ⅱ　調査に至る経緯と経過

近年においては方格地割の範囲を確定するため，北・西辺を中心に調査が進められてきた。平成 25 年度の第 31 次調査では金藪周辺で確認された「北限大溝」（吉田真 2004 ほか）の西側への延長を求めた（藤原 2014）。平成 24 年度の第 30 次調査（新田 2013）および翌年度の第 32 次調査（藤原 2015）では拡大方格地割で想定される「丸内南西」ブロックの西辺に調査区を設定し調査を行ったが，いずれも区画溝等は確認されず，拡大方格地割案の「丸内南西」ブロックの存在は否定的となった。結局，方格地割で確実なものは南北大路を中心に東西 4 ブロック・南北 3 ブロックと考えることが妥当であろう（Fig.2）。

平成 26 年度の調査から，方格地割の東・南辺の確認

Tab.1　調査履歴

次数	調査年度	調査区記号	所在地	調査期間	面積（㎡）	調査原因	概要
プレ 1 次	1957	A 地点	広瀬町字南野			学術	礎石建物
		B 地点	広瀬町字矢下				基壇
1 次	1992	長塚 1	広瀬町字長塚 1247,1248	921110 ～ 930129	110	学術	礫敷き遺構
		南野 1	広瀬町字南野 971		115		礎石建物
		荒子 1	広瀬町字荒子 981		110		瓦溜・溝
2 次	1993	6AHI-F、6AJA-A ほか	広瀬町字仲起 1226・矢下 1134 ほか	931129 ～ 940228	238	学術	政庁後殿・東隅楼・軒廊・東内溝・東外溝・西外溝
3 次	1994	6AJA-J ほか	広瀬町字矢下 1131 ～ 1133	941006 ～ 941227	750	学術	政庁正殿・西脇殿・西軒廊・西内溝・西外溝
3-2 次	1994	県調査区	広瀬町字中土居 , 亀山市能褒野町字中土居	940601 ～ 940817	2,700	県緊急	溝
4 次	1995	6AJA-A ほか	広瀬町字矢下・荒子・仲起	950920 ～ 951219	254	学術	政庁後殿・北外溝・西内溝・西隅楼
4-2 次	1995	県調査区	広瀬町字中土居 , 亀山市能褒野町字中土居	950605 ～ 950713	1,600	県緊急	溝
5 次	1996		広瀬町字丸内	960620 ～ 960716	133	市緊急	竪穴住居・溝
6 次	1996		広瀬町字矢下	960625 ～ 960719	288	市緊急	溝
7 次	1996	6AGE-A	広瀬町字南野 972,972-1, 972-2,973	961007 ～ 970121	580	学術	掘立柱建物・礎石建物・溝
8 次	1997	6AFB-A	広瀬町字長塚 1279-2	971016 ～ 980210	632	学術	倒壊瓦・礎石建物・溝
9 次	1997	A 地区	広瀬町字矢下	980223 ～ 980320	21	市緊急	政庁南辺部
		B 地区	広瀬町字矢下		26		政庁西脇殿
		C 地区	広瀬町字仲起		5		溝
10 次	1998	6AFB-B	広瀬町字長塚 1279-3,1279-5	980901 ～ 981228	1,014.2	学術	礎石建物・溝・土坑
11 次	1999	6AJA-H ほか	広瀬町字矢下 1176 ほか	990901 ～ 000131	863	学術	溝・礎石建物・南門
12 次	2000	6AHI-CF ほか	広瀬町字中起・荒子	001001 ～ 010311	1,142.8	学術	掘立柱建物・竪穴住居・溝
13 次	2001	6AHD-AB ほか	広瀬町字中起 1237, 1240-1 ～ 3,1241	010920 ～ 020214	714.2	学術	溝・土坑
14 次	2001	6AEC-AB	広瀬町字中土居 1282-1	020106 ～ 020111	246	市緊急	礎石建物・溝
15 次	2002	6AJJ-D ほか	広瀬町字矢下 1 154 ほか	020424 ～ 020812	1,184.1	学術	溝・土坑・古墳・土壙墓
16 次	2002	6AJF-B ほか	広瀬町字矢下 , 西冨田町字東起・矢卸	020620 ～ 020925	3,463.4	市緊急	溝・掘立柱建物・土器棺墓・古墳周溝・方形周溝墓
17 次	2002	6ADB － A ～ E	広瀬町字西野 3300	020806 ～ 021130	4,640	市緊急	掘立柱建物・溝・竪穴住居
18-1 次	2003	6AJC-F	広瀬町字矢下 1126	030417 ～ 030630	243	学術	溝
		6AJD-E	広瀬町字矢下 1144	030421 ～ 030630	267		溝
		6ALE-A	西冨田町字矢卸 1015 － 17	030528 ～ 030630	21		なし
		6ALE-B	西冨田町字矢卸 1015 － 17	030528 ～ 030630	11		なし
		6ALC-G	西冨田町字矢卸 1015 － 15・16	030528 ～ 030630	48		なし
18-2 次	2003	6AEA-A	広瀬町字中土居 1283-2	030902 ～	360		溝・土坑
19 次	2004	6AAD-A	広瀬町字丸内 2609-1	040831 ～ 041118	220	学術	溝
		6AFA-A	広瀬町字中土居 1290-1	040913 ～ 041118	200		なし
		6ABB-A	広瀬町字長塚 1275	040928 ～ 041118	550		竪穴住居
20 次	2005	6AAD-B	広瀬町字丸内 2606-1 2607-1,2608-1	050822 ～ 051130	200	学術	溝
		6AGF-A	広瀬町南野 945-6	051011 ～ 051130	140		溝
21 次	2006	6ACB-A	広瀬町字西野 3242	060719 ～ 060908	500	学術	溝・土坑
22 次	2007	6ADC-A	広瀬町字西野 3311	071001 ～ 071206	326	学術	風倒木・ピット
23 次	2007	—	亀山市			亀山市緊急	溝
24 次	2008	6AEB-C	広瀬町字中土居 1282-2	080616 ～ 080717	835	市緊急	溝・撹乱坑多数
25 次	2008	6ACA-A・B	広瀬町字西野 3243 番 3248 番	081001 ～ 081226	690	学術	溝・礫敷き遺構
26 次	2008	6ADC-B	広瀬町字西野 3313 の一部	081218 ～ 081226	55	学術	溝・土坑・風倒木
27 次	2009	6AFF-A	広瀬町字長塚 1244 番	090817 ～ 091216	580	学術	溝（道路跡）・ピット・風倒木
28 次	2010	6ABA-B	広瀬町中土居 1305 番 1	101101 ～ 110131	59	学術	なし（風倒木のみ）
29 次	2011	6ABA-C	広瀬町中土居 1299 番 1	111201 ～ 120229	116	学術	溝
30 次	2012	6AAE-A	広瀬町字丸内 2612 番 1	121201 ～ 130228	81	学術	なし
31 次	2013	6AAC-D	広瀬町字丸内 2600 番 1	140122 ～ 140314	140	学術	ピット
32 次	2013	6AFF-F	広瀬町字丸内 2626 番	140218 ～ 140328	63	学術	なし
33 次	2014	6AIB-C	広瀬町字荒子 1038 番	150105 ～ 150304	61	学術	ピット
34 次	2015	6AGH-C	広瀬町字南野 955 番 3	160201 ～ 160315	132	学術	溝・風倒木
		6AIF-E	広瀬町字荒子 985 番		81		溝・土坑・風倒木
これまでの調査面積					26808.2		

調査に方針を変えた。平成 26 年度の第 33 次調査は政庁と北方官衙の間で行い，方格地割の南北大路が政庁と繋がる可能性について，大路東側溝の延長線上を調査したが溝は確認されなかった（藤原 2015）。

本年，平成 27 年度は第 34 次調査として方格地割南東部において，東および南への広がりを確認する調査を行うことにした。当然，南東隅地点を調査することが最も効率的であるが，該当地点はすでに造成されて事業用地となっているため発掘調査の実施は困難であった。次善の案として以下の 2 地点を調査区とした。

第 1 地点は広瀬町南野地区に設定した。平成 17 年の第 20 次調査において「南野南」ブロックの 6AGF-A 区調査で南北溝 SD266 が検出された。この溝は「南野南」ブロックの東辺外溝，つまり方格地割東限溝と考えられている（小倉 2006）。もし，「南野南」ブロック北側の街路がさらに東に延長するとした場合に，街路に伴う溝が横切る可能性がある畑を 6AGH-C 区とした（Fig.5）。

第 2 地点は荒子地区に設定した。平成 4 年度第 1 次調査の「荒子 1」地区の北東に隣接する。この地区ではもとより瓦の散布が見られ，調査によって礎石建物の基礎地業と思われる遺構が確認されている（浅尾 1993）。さらに，方格地割東限の溝 SD266 を南に延ばした線上に，旧地割の名残と見られる農道が見出されたため（Fig.10　矢印①），それにかかる畑を選び 6AIF-E 調査区とした（Fig.8）。

現地調査は平成 28 年 2 月 1 日から着手し，3 月 15 日をもって終了した。以下，調査日誌を抄録することで調査の経過にかえる。

《調査日誌抄》

2 月 1 日（月）　本日から調査開始。小型重機により 6AGH-C 区の表土を除去する。溝から瓦 1 点が出土した。

2 月 2 日（火）　6AGH-C・6AIF-E 両調査区に座標を振り込み，6AGH-C 区に実測用グリッドピンを打つ。

2 月 8 日（月）　本日から作業員 2 名を投入。6AGH-C 区の壁立て作業後，南北トレンチの遺構検出を行う。細い地境溝のみ検出される。検出状況を写真撮影。

2 月 9 日（火）　現場に集合するも降雨により作業中止。

2 月 10 日（水）　未明の雨のため結局作業は中止。

2 月 11 日（木）　6AGH-C 区南北トレンチの遺構平面図実測および溝の断ち割り作業を行う。

2 月 12 日（金）　小型重機により 6AIF-E 区の表土を除去する。6AIF-E 西トレンチで南北溝を確認される。6AGH-C 区東西トレンチで遺構検出を続ける。トレンチ東端にサブトレンチ設定し掘削したところ，風倒木痕と下層の溝を新たに検出。遺構検出状況の写真を撮影する。

2 月 15 日（月）　作業員は 6AIF-E 区へ移動する。調査区の壁立ての後，遺構の検出作業に移る。

2 月 16 日（火）　6AIF-E 区の遺構検出作業を続ける。南北溝 SD335 にサブトレンチを入れる，底面から丸瓦出土。午後には 6AIF-E 区に実測用グリッドピンを打つ。

2 月 19 日（金）　6AIF-E 区の土坑を半裁掘り，南端の溝状遺構にサブトレンチを入れるも風倒木痕であった。併行して平面図の実測を進める。清掃後に写真を撮影する。作業員は本日で一旦撤収となる。

2 月 20 日（土）　6AGH-C 区東西トレンチの平面図を実測する。

2 月 28 日（日）　6AIF-E 区 SD335 サブトレンチ断面図，SK336 断面図を実測する。

3 月 1 日（火）　降雪のため作業中止。

3 月 2 日（水）　午前中，調査区全域にレベル入れ。午後，6AGH-C 区の溝の断ち割りを追加する。断面図の実測作業を終え，現場作業は一旦終了となる。

3 月 11 日（金）　作業員を再投入して再清掃，シート・グリッドピン等機材撤収。国史跡伊勢国府跡調査指導会議委員による現地視察，その後考古博物館で指導会議。

3 月 15 日（火）　小型重機により埋め戻し。現場完了。

Ⅲ　6AGH-C 区の調査

1　基本層序

過去の調査から想定される土層は，Ⅰ：黒褐色土（表土・耕作土），Ⅱ：黒色シルト（通称「黒ボク」），Ⅲ：暗褐色砂質シルト（漸移層），Ⅳ：黄褐色砂質シルト層（地山・基盤層），Ⅴ：黄褐色礫混じり砂質シルト（下層基盤層）である。

しかし，今回の調査区ではこれまでの耕作により削平が進んでおりⅡ・Ⅲ層はほぼ失われていて，表土を除去するとⅣ層またはⅤ層が直ちに現れる状況である。黒ボクは風倒木痕および一部の遺構埋土にみられるのみであった。Ⅳ層がみられるのは南北トレンチ南端部，Ⅲ・Ⅳ層共にみられるのは東の谷に向かって徐々に下って行く東西トレンチの東端のみである。

2　調査の方法

拡大方格地割案において「南野南」「南野北」ブロックより東側への展開は，街路が東へ延びることを暗示する表現が見られるものの，方格地割については明確には示されていない（Fig.3）。当時，一帯は遺跡地図において「周知の埋蔵文化財包蔵地」外となっていて全く未調査であったことから判断の根拠に乏しいと判断されたためであろう。

今回の調査が，方格地割の東外縁では初めての調査ということになる。調査区設定の根拠は，方格地割南西部にあたる「中土居南」ブロックの北辺外周施設の外溝 SD257 の東端（X=-12369.54，Y=45490.00）及び内溝 SD258 の東端（X=-123700.62，Y=45490.00）から，これまでの調査で判明している方格地割の主軸の振れ N 0.96265° W（田部 2010）をもとに線を東に延ばした 2 線である。さらに各ブロック間には幅 12 m（40 尺）の街路があることが分かっているため，北側に 12 m間をおいて平行する 2 条の溝の線を想定し，この 4 線が全て通過する土地を求めた。ちょうどこの条件を満たす畑があったため，6AGH-C 区とした。冬キャベツが作付けされていたため，収穫を待って調査着手となった（Fig.5）。

まず，調査地の西辺に沿うように幅 2 mの南北トレンチを設定した。街路が存在した場合北側ブロックの内外溝及び南側ブロックの外側溝が掛かるはずである。さらに，南側ブロックの区画施設の内側溝が掛かるように，同トレンチの南端から幅 1 mの東西トレンチを同様に調査地の南辺に沿って設定した。想定溝の確認のみなら南辺の中ほどで目的は達せられるが，一帯の微地形や関連遺構・遺物の有無を確認するため同トレンチは対象地の東端付近まで延長した。

遺構検出は表土を除去してすぐに現れるⅣ・Ⅴ層上面で行った。東西トレンチ東端部は地山が東の谷に向かって低くなり，黒ボクの落ち込みが複雑に重なるため，サブトレンチを入れたところ，巨大な風倒木痕と溝 SD334 を検出した。

3　検出遺構（Fig.6・7）

SD329　南北トレンチの北東端から現れ，西辺の中ほどへと続く溝である。延長 7 mほどを検出した。N32.5° E に振れる。ほぼ直線的であるが西壁付近で緩やかに北側へカーブする。検出面で幅 0.2 m～ 0.4 m，検出面からの深さ 0.08 mでごく浅く，断面は皿状で埋土は黒色シルト（7.5Y2/1）である。

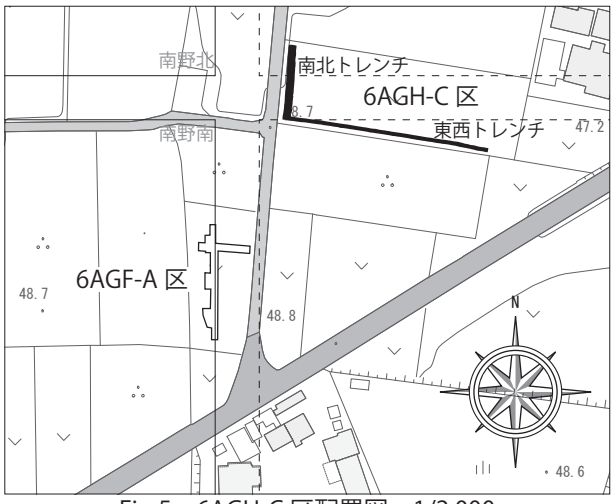


Fig.5　6AGH-C 区配置図　1/2,000

SD330　SD329 の東側に約 1.8 mの間隔をおいて平行する溝である。SD329 と共にいわゆる一間道の側溝を構成するのであろう。延長 5 mを検出した。カーブする道の外溝に当たるためか N40° E と若干大きめに振れるが，ほぼ直線的である。検出面で幅 0.3 m～ 0.5 m，検出面からの深さ 0.08 mでごく浅く，断面は逆台形状で埋土は黒色シルト（10Y1.7/1）である。

SD331　南北トレンチの南半で検出された。SD329・330 に直行する，直線的な溝である。N61.3° W に振れる。延長 2.5 mを検出した。検出面で幅 0.3 m，検出面からの深さは 0.1 mで，断面は皿状を呈する。埋土は黒色シルト（10Y2/1）で，下層に地山土細粒を含む。

SD332　東西トレンチの西よりで検出された。SD331 の延長である可能性が高い。表土除去時に上面から平瓦①が出土している。また，断面観察用のサブトレンチからも表面が磨耗した平瓦小片が出土した。延長 6 mを検出したが，N67.2° W に振れ，わずかに弧を描きながら SD331 に続くとみられる。検出面で幅 0.25 m～ 0.5 m，深さ 0.11 mで断面は逆台形状で，埋土は黒色シルト（7.5YR2/1）である。

SD333　東西トレンチの東半で検出された。SD332 に平行するように走る溝である。延長 83 mを検出した。N72° W に振れ，調査区内ではほぼ直線的である。延長すると南北トレンチ北半に現れ SD330 に交わるはずであるが確認されず，SD331・332 に平行するように緩やかに北に湾曲しながら延びているとみられる。検出面で幅 0.35 m～ 0.5 m，検出面からの深さ 0.1 mで断面は逆台形状で，南側が一段低くなっている。

SD334　東西トレンチの東端から南壁にかかって検出された。延長３mほどで途切れる。巨大な風倒木痕を切る。N73.4° W に振れる。調査区壁にかかるため断ち割りは行わなかったが，幅 0.4 m以上，埋土は黒色シルトである。

風倒木痕　6AGH-C 区東西トレンチ東端では巨大な風倒木痕を確認した。

4　出土遺物

平瓦①（Fig.11）表土除去時に出土した。出土位置から SD332 に伴うものであろう。平瓦の狭端側の破片である。焼成はよく，灰黄色（2.5Y6/2）を呈する。凹面は布目痕を横方向のケズリで消したあと，各辺に沿って幅 4cm ほど削り薄くし上げている。凸面は縦方向の縄目叩き痕を縦方向に撫でて消している。側縁は２面に面取りし，指押さえする。

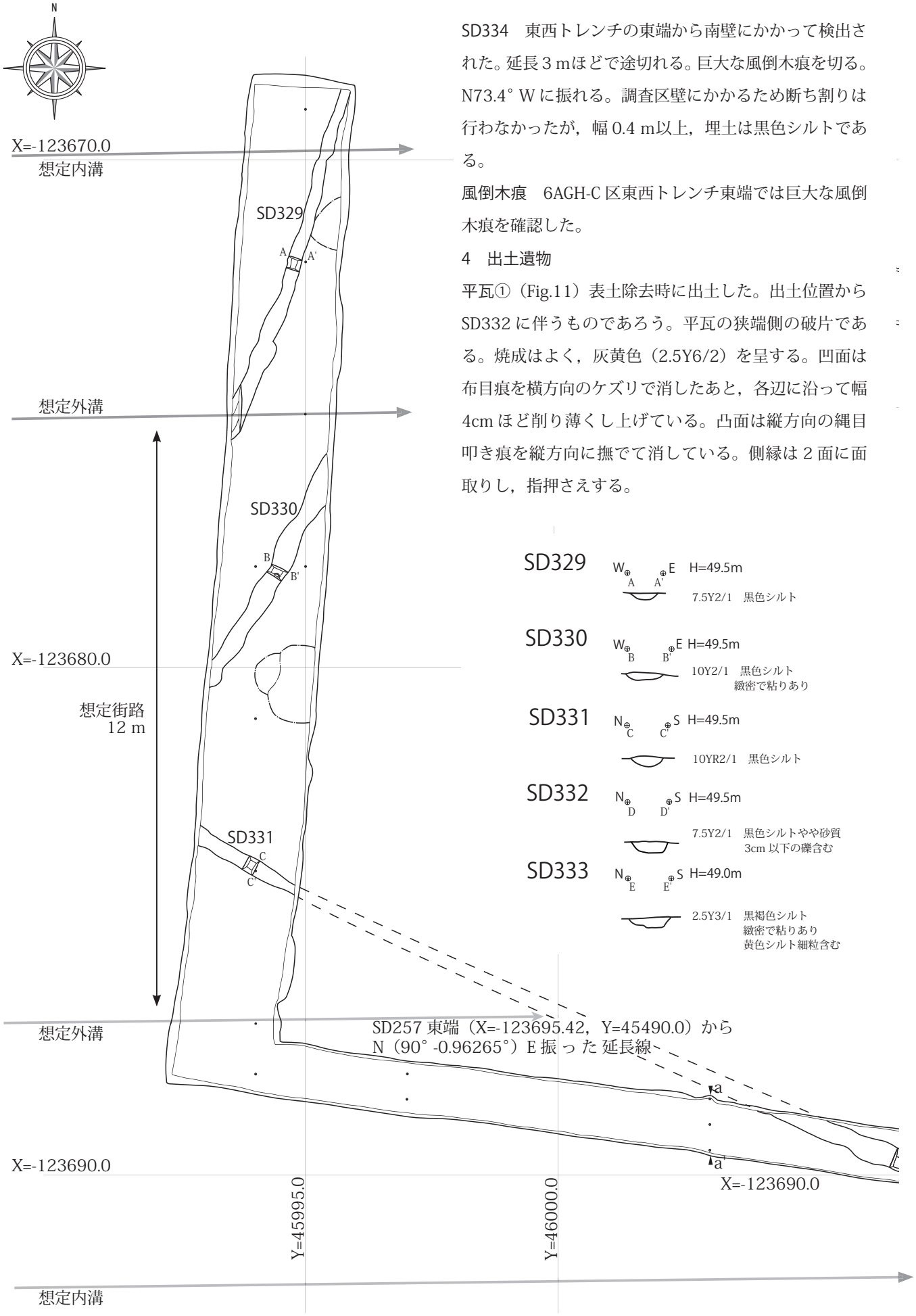


Fig.6　6AGH-C 区平面図①　1/100・溝土層断面図　1/50

5　6AGH-C 区調査のまとめ

調査の主眼とした正東西方向の区画溝は一条も検出されなかった。これをもって方格地割の東への拡大を全く否定することはできないが，方格地割の東限がこれまでの想定通り SD266 である可能性が一層高くなった。

今回の調査で検出された溝はいずれも後世の耕作に伴う地境溝とみられる。現在の耕作地の地割りよりもさらに大きく振れる道や地割が存在したわけである。現在みられる地割りは戦後すぐの航空写真でも確認され，おそらく北伊勢飛行場の整備に伴い敷設された新しい直線道路の影響を受け，新たに耕地整理されたもとみられ，今回検出された地割りはそれ以前のものであろう。

方格地割東限の溝 SD266 から東では等高線に拠る地割となっている。また，同地北側に位置する方格地割の「南野北」・「仲井南」ブロックでも東半は緩やかに湾曲する等高線に沿う地割がみられる（Fig.10　点線）。

対して「南野南」ブロックでは，これらの自然地形の断ち切るかのように方格の地割が確認される。古代に方格地割と官衙の整備に伴う整地が行われ，それに伴う外郭の築地または土塁が痕跡として後世まで地上に残っていたことから地表に明瞭に表れ，われわれに方格地割を想起させてくれたものであろう。

であるなら，地表に痕跡を留めない「南野北」「仲井南」ブロックの北・東辺部においては，土塁や築地については全く施行されず，あっても設計基準線の溝のみが掘られたに止まり直ちに埋没してしまった可能性が高い。

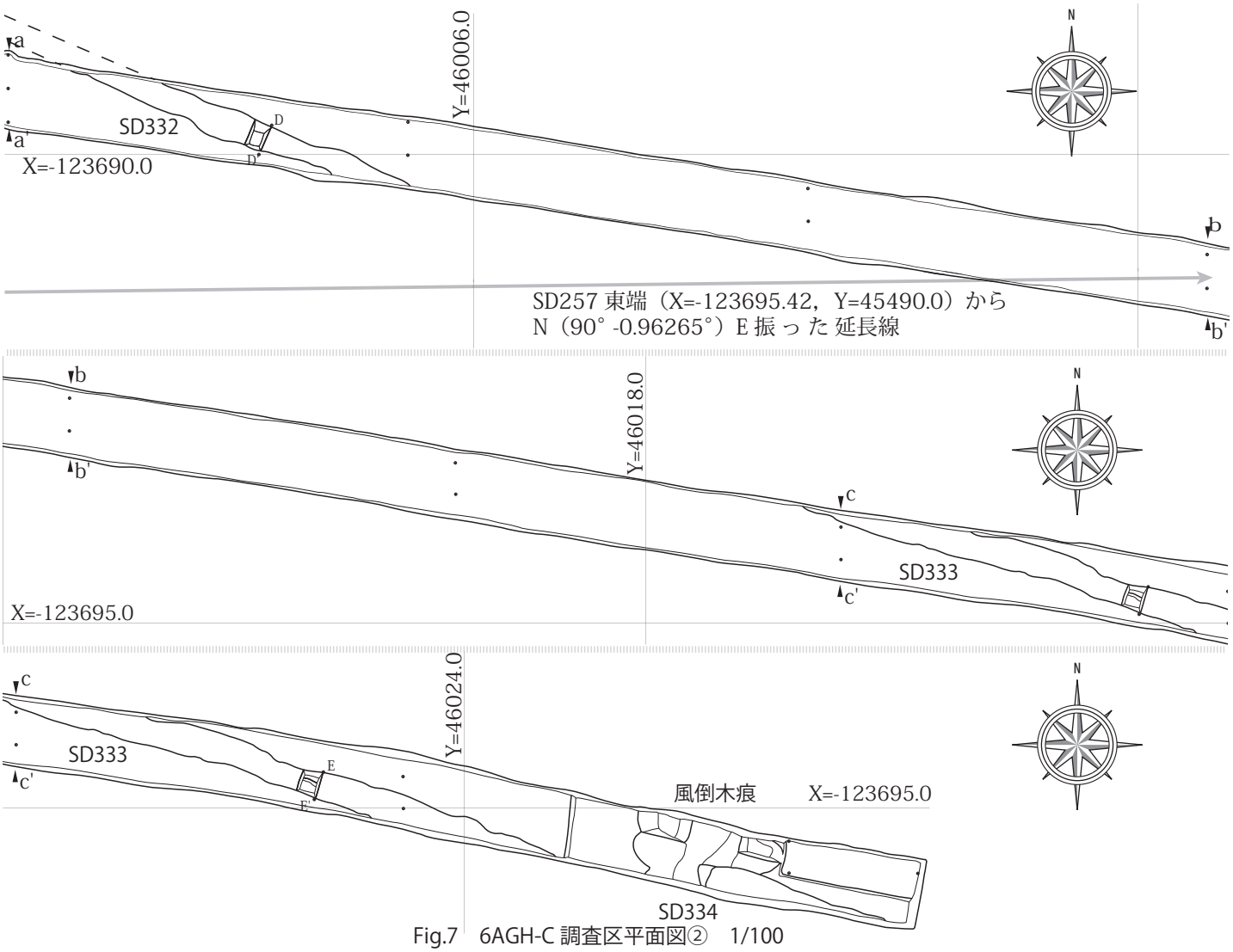


Fig.7　6AGH-C 調査区平面図②　1/100

Ⅳ　6AIF-E 区の調査

1　基本層序

基本は 6AGH-C 区と同じであるが，地山にあたるⅣ層が黄褐色粘質シルトである。6AIF-E 西側ではⅣ層がよく残っているが，6AIF-E 東側に行くに従い耕作による削平が進み，Ⅳ層は薄く，南半になると黄褐色礫混じり砂質シルトのⅤ層が耕作土の直下に現れる。

地山面には東西方向の耕運機による耕作溝が浅く走り，処々に重機による爪の跡が見られる。

2　調査の方法

調査地の南西に隣接して，平成 4 年度の第 1 次で調査を行った「荒子 1」区が所在し，礎石建物の基礎地業とみられる遺構が検出されている，この一帯に何らかの官衙が存在したことは確実である。

また，空中写真古い都市計画図からも方格地割の南東隅から真南に延びる地割のラインが見て取れ（Fig.10 矢印①），また，地籍図においてもそのラインに沿って幅 6m ほどの短冊状の土地がみられる。

この地割の痕跡にかかり，方格地割の東辺とされる 6AGF-A 区の SD266 の中心点 X=-123740.00，Y=45970.65 から方格地割の振れ N 0.96265° W をもとに南に延長した線が通るように幅 3m ×延長 6 mの 6AIF-E 西調査区を設定した。

地割の確認はこれで十分と思われるが，対象地の東半は東側に入り込む小さな谷に向かって緩やかに傾斜している良好な立地で，官衙の運営に関わるような何らかの遺構が存在する可能性を考え，幅 3 m×延長 21 mの 6AIF-E 東区を設定した。この設定をもとに小型重機で表土を除去し，ⅣまたはⅤ層の上面で遺構検出を行った。

3　検出遺構

SD335　6AIF-E 西区の東よりを南北に横断する溝である。断面の観察により 2 つの溝が重複していることが確認された。SD335-1 は基本となる溝で幅 1.75 m，検出面からの深さは北壁で 0.38 m，南壁で 0.32 mを図る。断面は逆台形状を呈する。下層埋土は黒色シルト（南面セクション⑩・⑪，北面セクション⑭・⑮）で，北面サブトレンチの西壁近くの⑮層から丸瓦②が，南面サブトレンチ西壁近くの⑪層上面から平瓦③・④が出土した。中層は地山土ブロックを極めて多く含む黒褐色またはオリーブ黒色シルト層（南面セクション⑨，北面セクション⑬）で，地山土が西側から流れ込んだ状態で堆積している。最上層は褐オリーブ黒色砂質シルト層（南面セクション⑧，北面セクション⑪・⑫ほか）である。断面の形状・堆積状況および遺物の出土状況は SD266 に類似する。古代に掘削された溝である可能性が高い。SD335-2 と SD335-1 は埋土が黒色シルトベースで大きな差が無く見極めが難しいが，SD335-1 の地山土ブロックを含む中層（南面セクション⑨，北面セクション⑬）を切っていることは確実なため，より新しいものと考えられる。上面幅 0.4 ～ 0.5 m，底部の幅 0.3 ～ 0.35 m，検出面からの深さは北壁で 0.56 m，南壁で 0.45 mで，SD335-1 の床面を掘り抜いている。断面は箱堀状の溝である。埋土は黒色～オリーブ褐色のシルトで，地山土のブロックや細粒を含む間層が挟まる。走行も SD335-1 からは少し振れるようである。遺物は出土しなかった。後世の地境溝であろうか。

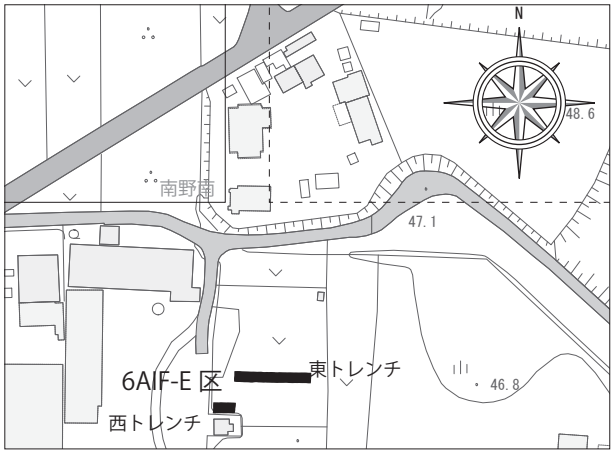


Fig.8　6AIF-E 区配置図　1/2,000

SK336　6AIF-E 東区の東端近くで検出された。巨大な風倒木痕を切って掘られている。直径ほぼ 1.0 mの円形で，検出面からの深さは 0.2 m。埋土は黒色シルト（黒ボク）で，出土遺物も無く，時期や性格は不明である。

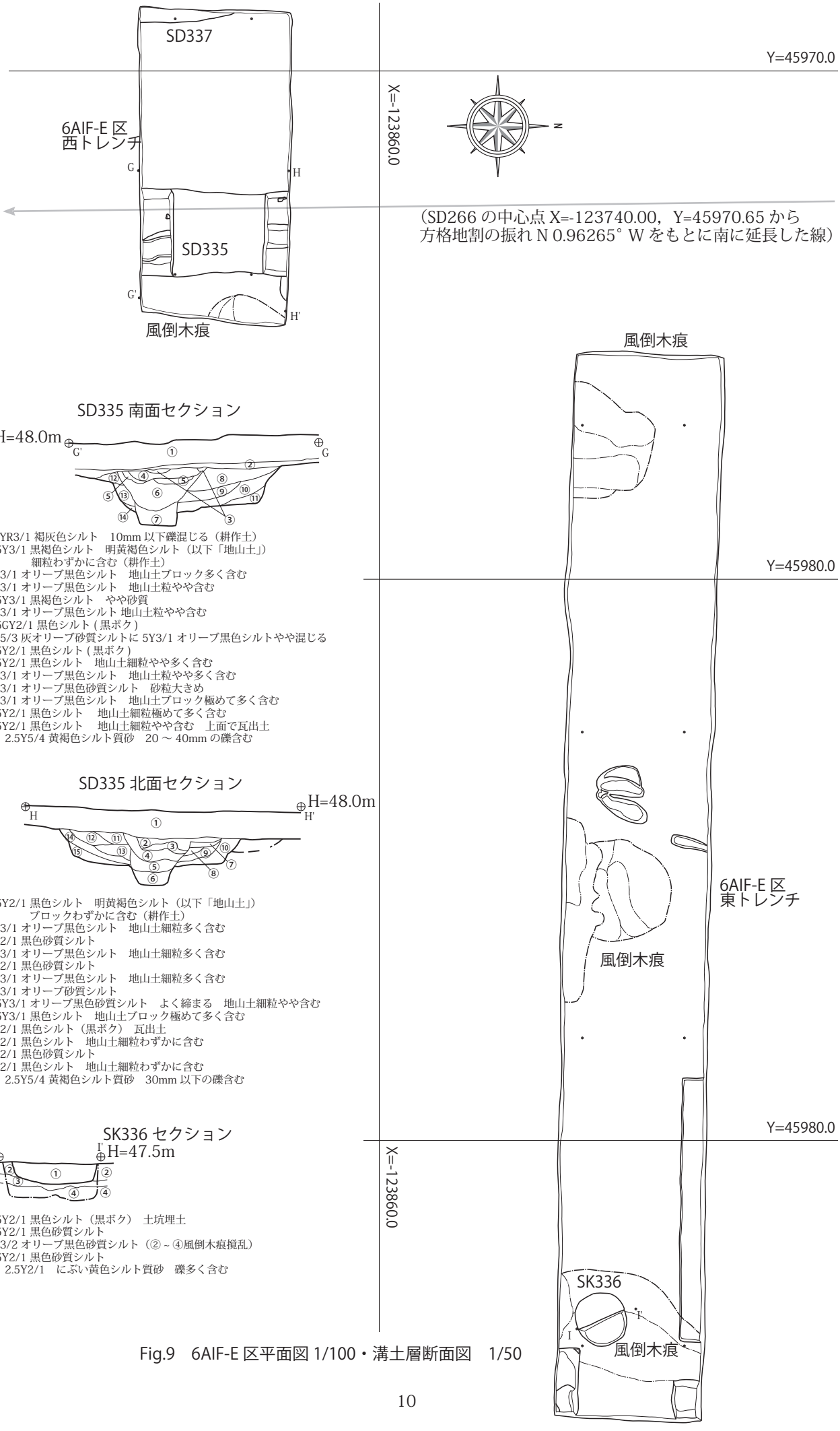
SD337　6AIF-E 西区 SD335 の西側約 3 m，調査区の肩にわずかに現われている溝状の落ち込みである。上層の埋土は新しいものの印象を受けるが，位置的に内溝にあたる可能性も考えられる。土地境界ぎりぎりのため今回は残念ながら拡張して確認することはできなかった。

風倒木痕　調査区の各所に見られる。特に 6AIF-E 東区の東端のものは巨大で，当初は調査区を横断する東西溝とも思えたため断ち割り調査を行ったが，層位や底部の状態が安定せず，風倒木痕と判断した。

4　出土遺物

丸瓦②　（Fig.11　2）玉縁式の丸瓦で胴部の玉縁付近の破片である。焼成はやや甘く軟質で，凸面は灰色（N6/），凹面は灰黄色（2.5Y6/2）を呈する。凹面は布目痕のまま無調整で，凸面は縦方向にナデ消し調整される。細めで薄く政庁出土のものに類似する。

平瓦③・④　（Fig.11　3・4）平瓦の小片である。いずれも焼成はよい。凸面には縦方向の縄目タタキ痕をとどめ，凹面は横方向に極めて丁寧なナデ調整が施される。③は凸面が灰色（5Y6/1），凸面が灰色（5Y6/1）～灰黄色（2.5Y6/2）を呈する。④の凸面は灰色（N5/），凸面は凸面が灰色（5Y6/1）～灰黄色（2.5Y6/2）を呈する。



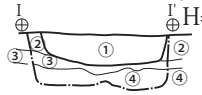
SD335 南面セクション

① 10YR3/1 褐灰色シルト　10mm 以下礫混じる（耕作土）
② 2.5Y3/1 黒褐色シルト　明黄褐色シルト（以下「地山土」）
　細粒わずかに含む（耕作土）
③ 5Y3/1 オリーブ黒色シルト　地山土ブロック多く含む
④ 5Y3/1 オリーブ黒色シルト　地山土粒やや含む
⑤ 2.5Y3/1 黒褐色シルト　やや砂質
⑥ 5Y3/1 オリーブ黒色シルト 地山土粒やや含む
⑦ 2.5GY2/1 黒色シルト (黒ボク)
⑧ 5Y5/3 灰オリーブ砂質シルトに 5Y3/1 オリーブ黒色シルトやや混じる
⑨ 2.5Y2/1 黒色シルト (黒ボク)
⑩ 2.5Y2/1 黒色シルト　地山土細粒やや多く含む
⑪ 5Y3/1 オリーブ黒色シルト　地山土粒やや多く含む
⑫ 5Y3/1 オリーブ黒色砂質シルト　砂粒大きめ
⑬ 5Y3/1 オリーブ黒色シルト　地山土ブロック極めて多く含む
⑭ 2.5Y2/1 黒色シルト　地山土細粒極めて多く含む
⑮ 2.5Y2/1 黒色シルト　地山土細粒やや含む　上面で瓦出土
地山　2.5Y5/4 黄褐色シルト質砂　20 ～ 40mm の礫含む

SD335 北面セクション

① 2.5Y2/1 黒色シルト　明黄褐色シルト（以下「地山土」）
　ブロックわずかに含む（耕作土）
② 5Y3/1 オリーブ黒色シルト　地山土細粒多く含む
③ 5Y2/1 黒色砂質シルト
④ 5Y3/1 オリーブ黒色シルト　地山土細粒多く含む
⑤ 5Y2/1 黒色砂質シルト
⑥ 5Y3/1 オリーブ黒色シルト　地山土細粒多く含む
⑦ 5Y3/1 オリーブ砂質シルト
⑧ 7.5Y3/1 オリーブ黒色砂質シルト　よく締まる　地山土細粒やや含む
⑨ 2.5Y3/1 黒色シルト　地山土ブロック極めて多く含む
⑩ 5Y2/1 黒色シルト（黒ボク）　瓦出土
⑪ 5Y2/1 黒色シルト　地山土細粒わずかに含む
⑫ 5Y2/1 黒色砂質シルト
⑬ 5Y2/1 黒色シルト　地山土細粒わずかに含む
地山　2.5Y5/4 黄褐色シルト質砂　30mm 以下の礫含む

SK336 セクション



① 2.5Y2/1 黒色シルト（黒ボク）　土坑埋土
② 2.5Y2/1 黒色砂質シルト
③ 5Y3/2 オリーブ黒色砂質シルト（② ~ ④風倒木痕撹乱）
④ 2.5Y2/1 黒色砂質シルト
地山　2.5Y2/1　にぶい黄色シルト質砂　礫多く含む

Fig.9　6AIF-E 区平面図 1/100・溝土層断面図　1/50

5　6AIF-E 区調査のまとめ

6AIF-E 区の調査では，南野南地区の外郭線を南に延長したライン上からわずかに東に振れていはいたが，区画の南北溝が検出されたことが大きな成果である。

SD335 は幅 1.75 m で，断面は逆台形状を呈する。6AGF-A 区で検出された外郭溝 SD266 も幅 1.4 ～ 1.7 m の断面逆台形で，埋土中層に西側から流れ込んだ黄色地山土ブロックを含む層が堆積している（小倉 2006）など，その様相は極めて類似している。SD335 が SD266 の続きであっても特に違和感を感じず，方格地割の東限溝は南東隅で閉じることなくそのまま南に延長する可能性が出てきた。

さて，この溝 SD335 の性格であるが，まず排水溝としての機能を考えてみる。遺跡が立地する台地はほぼ平坦なため，方格地割の溝が各隅で閉塞していたとすると，大雨の際当然雨水がオーバーフローしてしまう。おそらく，南辺東西の隅には何らかの排水施設があったと考えられる。これまでの調査指導の際にも，方格地割全域において溝が単なる区画施設なのか排水機能を有していたのかが検討課題として指摘されてきた。SD266 の南端の底面は標高 48.4 m，SD335 の底面は 47.4 mあまりであるので，溝が連続していれば雨水は当然 SD335 側に流れるはずである。しかし，斜度は 10‰程度と極めて緩慢であり，両者の堆積状況をみるとたびたび水が流れたような堆積状況はみられない。さらに，方格地割南東隅の東には谷が入って来ているため（Fig10 「谷」），排水のみを考えれば南東隅から東側へ抜くほうが合理的である。SD335 に排水機能を求めることは適切でないと思われる。

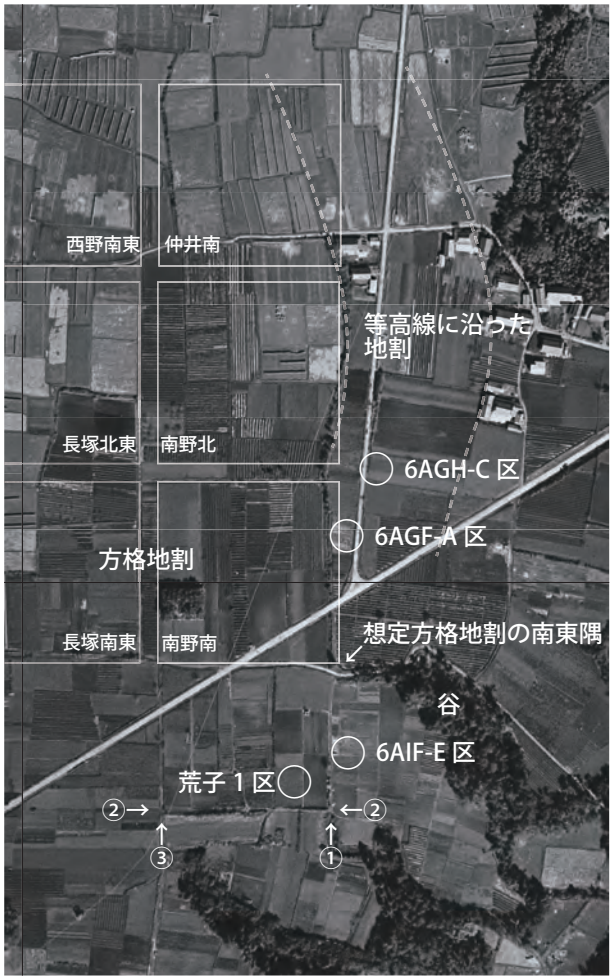


Fig.10　調査地周辺空中写真
（国土地理院撮影〔S36〕の空中写真〔MKK61-7-C2-9〕を加工）

とすれば，やはり問題とすべきは官衙の区画施設に絡むものであろう。空中写真等から，今回調査対象とした南北の地割線（Fig.10　矢印①）とともに，「荒子 1」調査区のすぐ南側に東西方向の明確な地割線が見いだされる（Fig.10　矢印②）。また，西側には方格地割「南野南」ブロックの西辺から南に下る地割線（Fig.10　矢印③）も見出すことができる。これらから，東西 120m ×南北 100 mほどの長方形の区画によるブロックを想定することが可能である。これまで想定・検証してきた北方官衙の方格地割の区画・街路システムとは若干性格を異にするが，方位や規格が全く異なるわけではなく無関係なものともいいがたい。

考えられるのは，第 1 にこの官衙が先行して存在したため，方格地割敷設の際にその部分を取り込むように一区画を設けたという可能性である。第 2 に，政庁整備の初期段階から，方格地割の原計画が拡大方格地割案とまではいかないまでも政庁周辺を囲い込むように存在し，その外郭線がすでに施されていて，それを利用して政庁に近いブロックを利用して官衙が営まれ，それにやや時間差をもって北方官衙が整備されたため，このような構造になった可能性のいずれかということになろう。

政庁と北方官衙の方格地割間には空白域があり，また出土した土器や瓦の技法から若干の時期差があることは繰り返し述べてきた（新田 2011・2012）。この荒子地区の官衙はその両者を繋ぐ数少ない接点であり，今後注目していくべきエリアといえよう。

しかし，東トレンチでも明らかなように，他の官衙遺跡であれば運営に密接に関わる竪穴建物や廃棄土坑などの遺構が密集しているはずの，谷に近い東向きの平坦地でも遺構密度は極めて希薄であり，年代を示す遺物に欠ける点がこの遺跡の特色といえ，難しいところでもある。

Ⅴ　全体のまとめ

伊勢国府跡におけるここ数年の調査は，史跡追加指定範囲を確定するため，北方官衙の方格地割の外縁部の確認調査を淡々と進めてきた。今回，6AGH-C 区の調査では後世の地境溝が検出されたのみであるが，方格地割の区画溝の延長は認められず，方格地割の東限について結論らしきものが出たことは一つの成果であろう。

6AIF-E 区の調査では，新たに方格地割の東限溝が想定を超え，南方の荒子地区へ延長するらしいことが明らかになった。現状では全く孤立した存在に見える国府政庁にとって「荒子１」地区の官衙は最も近い存在で，その運営に密接な関わりがあった可能性がある。しかし，調査の初期段階から確認されていたにもかかわらず,「北方官衙の方格地割＝伊勢国府の最大特性」という認識のもとそちらの調査を優先して進められてきたため，ほとんど考察の対象とされること無く現在に至っている。今回の調査では区画溝１条を検出したにとどまり，この官衙について核心に迫るものでは全くないが，政庁周辺域についても意識を新たにして調査を進めていく必要性を感じさせるものとなった。

[参考文献]

浅尾悟 1993『伊勢国分寺跡（5 次）長者屋敷遺跡（1 次）』 鈴鹿市教育委員会
石田浩司・杉立正徳・林和範　2001『基盤整備促進事業（担い手育成型）国府南部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査　天王山西遺跡　三宅神社遺跡　梅田遺跡』鈴鹿市教育委員会
宇河雅之 1996「長者屋敷遺跡」『長者屋敷遺跡・峯城跡・中冨田西浦遺跡』三重県埋蔵文化財センター
宇河雅之 1997「伊勢国府の方格地割」『研究紀要』第 6 号 三重県埋蔵文化財センター
小倉整 2006『伊勢国府跡 8』鈴鹿市考古博物館
杉立正徳 1997「長者屋敷遺跡（第 5 次）発掘調査報告」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅳ』鈴鹿市教育委員会
杉立正徳 1997「長者屋敷遺跡（第 6 次）発掘調査報告」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅳ』鈴鹿市教育委員会
鈴鹿市考古博物館 2002『伊勢国府跡史跡指定ミニシンポジウム 近畿・東海の国府　発表要旨集』鈴鹿市考古博物館
田部剛士 2007「富士遺跡（第 2 次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第 9 号 鈴鹿市考古博物館
田部剛士 2007『伊勢国府跡 9』鈴鹿市考古博物館
田部剛士 2009『伊勢国府跡 11』鈴鹿市考古博物館
田部剛士 2010『伊勢国府跡 12』鈴鹿市考古博物館
田部剛士 2011『伊勢国府跡 13』鈴鹿市考古博物館
田部剛士 2016『平田遺跡』鈴鹿市考古博物館
辻公則 1996「国府政庁の規格性～近江国・伊勢国について～」『鈴鹿市埋蔵文化財年報』Ⅲ 鈴鹿市教育委員会
新田剛 1997「三宅神社遺跡」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』鈴鹿市教育委員会
新田剛 1994『伊勢国分寺･国府跡－長者屋敷遺跡ほか発掘調査事業報告』鈴鹿市教育委員会
新田剛ほか 1996『伊勢国分寺・国府跡』3　鈴鹿市教育委員会
新田剛ほか 1997『伊勢国分寺・国府跡』4 鈴鹿市教育委員会
新田剛 1998「長者屋敷遺跡発掘調査概要（９次）」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅴ』鈴鹿市教育委員会
新田剛 1999『伊勢国府跡』鈴鹿市教育委員会
新田剛 2000『伊勢国府跡 2』鈴鹿市教育委員会
新田剛 2001『伊勢国府跡 3』鈴鹿市教育委員会
新田剛 2011「伊勢国府の成立」『古代文化』第 63 巻第 3 号　財団法人古代学協会
新田剛 2011『伊勢国府・国分寺跡』同成社
新田剛 2012『伊勢国府跡 14』鈴鹿市考古博物館
新田剛 2013『伊勢国府跡 15』鈴鹿市考古博物館
新田剛 2014「伊勢国庁と関連遺構」『駒澤考古』39
新田剛 2015「東海道　伊勢」『古代の都市と条里』条里制・古代都市研究会　吉川弘文館
林和範 2006「平田遺跡（5 次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第 7 号 鈴鹿市考古博物館
藤岡謙二郎・西村睦男 1957「歴史地理的にみた鈴鹿市廣瀬台地の初期歴史時代遺跡群－軍團阯の問題と附近の開發をめぐって－」『史迹と美術』第 279 号
藤原秀樹 1997「三宅神社遺跡（第 2 次）」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』鈴鹿市教育委員会
藤原秀樹ほか 1995『伊勢国分寺・国府跡 2』鈴鹿市教育委員会
藤原秀樹 2014『伊勢国府跡 16』鈴鹿市考古博物館
藤原秀樹 2015『伊勢国府跡 17』鈴鹿市考古博物館
水野福松 1907『高津瀬村誌』
水橋公恵 2005『伊勢国府跡 6』鈴鹿市考古博物館
水橋公恵 2005『伊勢国府跡 7』鈴鹿市考古博物館
村山邦彦 1992「鈴鹿市広瀬長者屋敷遺跡の研究」『古代学研究』128 号 古代学研究会
吉田隆史 2009「富士遺跡（第 3 次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第 11 号 鈴鹿市考古博物館
吉田真由美 2004「伊勢国府（16 次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第 5 号 鈴鹿市考古博物館
吉田真由美 2002『伊勢国府跡 4』鈴鹿市教育委員会
吉田真由美 2003『伊勢国府跡 5』鈴鹿市教育委員会
吉田真由美 2004「伊勢国府（16 次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第 5 号 鈴鹿市考古博物館
吉田真由美 2004「伊勢国府（17 次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第 5 号 鈴鹿市考古博物館

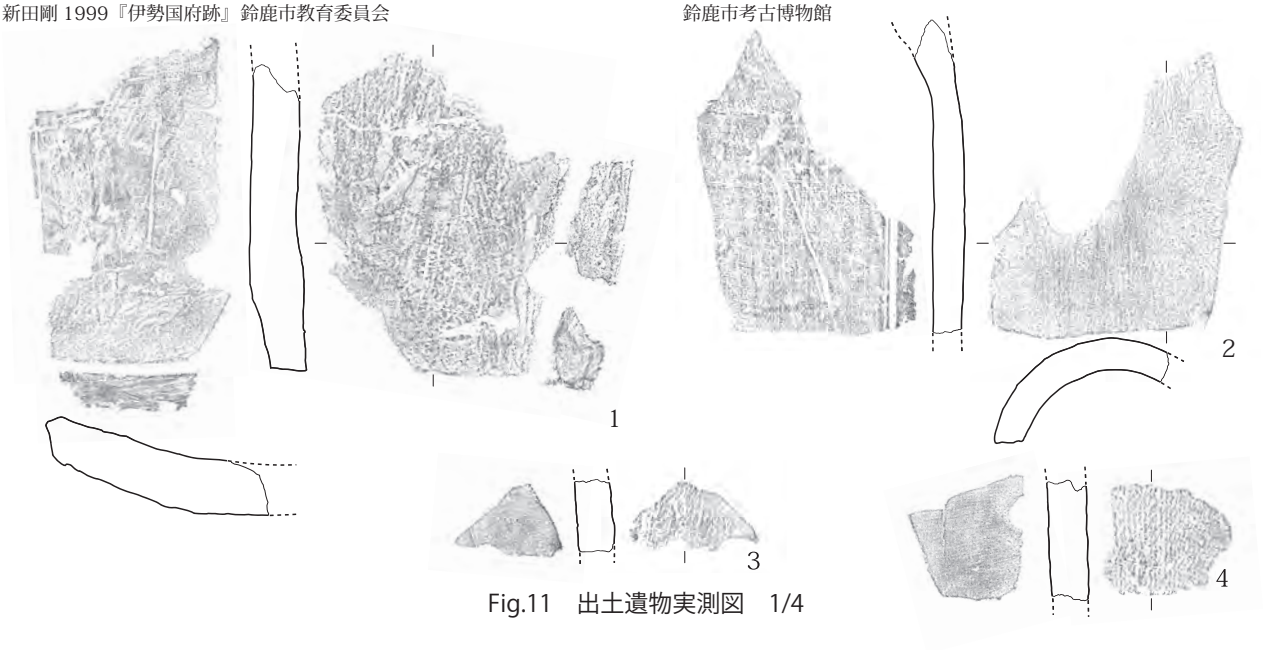


Fig.11　出土遺物実測図　1/4

1 6AGH-C 区調査前風景（南西から）

2 6AGH-C 区南北トレンチ全景（南から）

3 SD329・330（北西から）

4 SD329・330（南西から）

5 SD331（西から）

6 6AGH-C 区東西トレンチ表土除去風景（東から）

7 6AGH-C 区南北トレンチ全景（北から）

8 6AGH-C 区東西トレンチ全景（西から）

9 6AGH-C 区東西トレンチ全景（東から）

10　SD332（西から）

11　SD333（西から）

12　6AGH-C 区東西トレンチ東端サブトレンチ（西から）

13　SD334 及び風倒木痕（西から）

14　6AIF-E 区調査前風景（北から）

15　6AIF-E 区西トレンチ表土除去風景（西から）

16　6AIF-E 区西トレンチ全景（西から）

17　SD335（北から）

18 SD335 北サブトレンチ北面セクション（南から）

19 SD335 北サブトレンチ丸瓦出土状況（東から）

20 SD335 南サブトレンチ北面セクション（南西から）

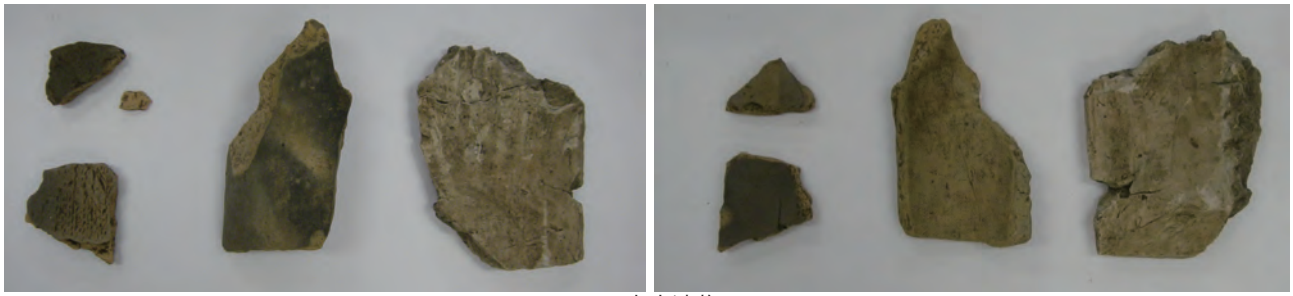
21 SD335 南サブトレンチ南面セクション（北から）

22 6AIF-E 区東トレンチ遺構検出作業風景（西から）

23 6AIF-E 区東トレンチ全景（西から）

24 SK336 および風倒木痕（北から）

25 SK336（北東から）



26 出土遺物

Tab.2

報 告 書 抄 録

ふりがな	いせこくふあと じゅうはち
書　　名	伊勢国府跡　18
副 書 名	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	藤原　秀樹
編集機関	鈴鹿市 文化振興部　考古博物館
所 在 地	〒 513-0013　　三重県鈴鹿市国分町２２４番地　　TEL 059（374）1994
発行年月日	2016 年 3 月 31 日

所収遺跡名	所　在　地		コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	調査面積	発掘原因
伊勢国府跡（長者屋敷遺跡）第 34 次	鈴鹿市広瀬町 字南野 955 番 3（6AGH-C 区）		24207	363	34°53′14″	136°29′02″	2016 年 2 月 1 日 ～ 2016 年 3 月 15 日	132㎡	学術調査
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
	官衙	奈良・平安	溝・風倒木痕		平瓦			方格地割は東へは広がらない。	
	所在地		コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	調査面積	発掘原因
	鈴鹿市広瀬町 字荒子 985 番（6AIF-E 区）		24207	363	34°53′08″	136°30′01″	2016 年 2 月 1 日 ～ 2016 年 3 月 15 日	81㎡	学術調査
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
	官衙	奈良・平安	溝・土坑 風倒木痕		平瓦・丸瓦			6AGF-A 区で検出された方格地割東辺溝 SD266 から南に向かって延長したライン上で，類似する南北溝 SD335 が検出された。	

伊 勢 国 府 跡　18

発行日　平成 28（2016）年 3 月 31 日
編集・発行　鈴鹿市
鈴鹿市考古博物館
〒５１３－００１３
三重県鈴鹿市国分町２２４番地
TEL　０５９（３７４）１９９４
FAX　０５９（３７４）０９８６
E-mail：kokohakubutsukan@city.suzuka.lg.jp
URL：http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/
印刷　株式会社　三ツ星

Ise Kokufu Site

Preliminary Report No.18

March, 2016

Suzuka Municipal Museum of Archaeology